

11月の行事予定

17日 条例改正説明会

29日 正副会

うおいち(株)の11月の商品情報を

ホームページに掲載しています。参考に
していただけたら、幸いです。

11月組合の異動

10月末日組合員総数259社

サンマ8月支出量2倍 家計調査

マグロ、サケ量額増 (9月28日みなと新聞)

総務省が7日に発表した8月の家計調査によると、食料品全体の支出額は前年同月比6%増の10万2443円だった。魚介類全体の支出額は2%増の5953円となった。マグロやサケ、サンマといった主要魚種は、量額ともに増加した。生鮮魚介の支出額は6%増の3327円だった。魚種ごとでは、マグロの数量が28%増、支出額が12%増の504円。サケは数量が9%増えて、支出額が12%増の455円。サンマは数量が2.1倍となり、支出額は2.3倍の135円だった。塩干魚介は前年同月と変わらず1041円。うち塩サケの数量は14%増加し、その支出額は9%増の217円。タラコは9%減の155円、シラス干しは4%減の130円だった。刺身盛り合わせは2%減の421円。魚肉ねり製品は前年同月と変わらず660円。揚げかまぼこ、ちくわの支出額は増加したが、かまぼこは8%減少した。一般外食は10%増の2万325円。うち、寿司の支出は17%増の2013円。日本そば・うどん、中華そば、洋食、喫茶などにかかる外食の支出額もそれぞれ伸びた。また、コメの支出額は21%増の3374円。肉類は5%増の8626円で、魚介類全体(5953円)を上回った。集計世帯数は7256、世帯人員は2.9人だった。

【さかなの動き】道産ホタテ 水揚量14%減22万トン
9月末 猿払村、枝幸は計画達 (9月28日みなと新聞)

漁期終盤戦に入った北海道オホーツク沿岸のホタテ漁。北海道漁連まとめによる9月30日現在の水揚量(漁場造成含む、サロマ湖養殖除く、速報値)

は、

(右欄上に続きます)

北部(宗谷―枝幸)が前年同期比5%減の10万700トン、南部(雄武―ウトロ)が20%減の12万1900トン、トータルで14%減の22万2600トンとなっている。北部は猿払村、枝幸の2単協が水揚げ計画をクリアし、消化率98%の頓別漁協も達成確実。消化率9割の宗谷漁協は8日現在、10月末で終漁予定だが、「一度しけると1週間ほど沖に出られなくなることがあり、11月に少しかかる可能性もある」といい、最終水揚量は「計画通りで、若干上回るかもしれない」。一方、南部の漁協は達成率が6割台後半～8割台半ば。沙留漁協は10月末の終漁予定を、8日に開いたホタテ部会役員会で11月15日まで延長を決定。理由を「夏場に暑さ対策で水揚げを早上がりできるように新しい漁場に次々と手を付けていったため、あちらこちらに残存貝があり、来春の稚貝放流に向けて取り残しを減らしておきたい」と説明。計画は1万8000トンだが、貝の成長不良で最終的に「多くても1万6500トン程度」とみる。他の漁協は11月下旬に終漁する予定だ。

物価上昇8割の家庭に影響 住友生命保険

調査も 食料最多、年収増は1割 (10月9日みなと新聞)

住友生命保険が9日発表した「わが家の台所事情アンケート」によると、約8割の家庭が物価上昇の影響を受けていると回答、項目は「食費」が9割超と最多だった。一方、前年より年収増を見込む人は全体の1割強にすぎず、物価高と、それに見合う所得のギャップが依然として大きいことが改めて示された。調査は9月上旬、20～60代の正規雇用の男女5484人を対象にインターネットで行った。

(次ページ左欄上に続きます)

【さかなの動き】北部太平洋サバ メインの
操業始まる 銚子中心に浜値4割高 (10月9日みなと新聞)

10月に入り北部太平洋でサバ狙いの操業が動き始めた。9月はイワシやスルメイカなどの漁獲が振るい、大中型巻網や沖合底引網は他魚種狙いの操業が続いていた。昨年のサバ漁は10月末に漁獲が上向いたため、産地関係者は強い関心を持って見守っている。北部太平洋巻網（北まき）船団は10月3日からサバを主体とする水揚げをスタートした。イワシ主体の入網にサバが混ざる水揚げはあったが、サバがメインとなるのは今年の秋季初。千葉・銚子沖を主漁場に7カ統が操業し、1～8日で1100トン进行漁獲した。平均浜値（全水揚げ地合算）はキロ250円。青森・八戸主体に水揚げした前年同期より4割ほど高い。水揚げ地は銚子漁港が中心。3日に120トン、4日に250トン、6日に370トン进行水揚げした。1尾200グラム主体で脂のりは薄い。加工筋からの引き合いが強く、中心卸値はキロ260～200円で推移する。沖底をみると、石巻魚市場（宮城県石巻市）には10月2週目時点で、日量100～200トン进行水揚げ。脂のりは「それほど良くない」（同市場卸）が、1尾400グラム前後と大型主体。キロ200～190円と前年同期より5～6割ほど高めに推移している。

サバ情報 年内1000円超えも視野
枠持ち越しで終漁かノルウェー (10月10日水産経済新聞)

ノルウェーサバ漁は枠の9割を消化し、最終盤にある。焦点である価格は上昇ペースこそ一服したもの、過去最高値を更新中だ。シーズン冒頭に一部で「年明けキロ1000円（内販ベース）超えもあるかもしれない」とささやかれていたのが、9月末の来期枠の7割削減勧告もあって“年内1000円超え”も視野に入る異常事態に突入している。

（右欄上に続きます）

商社筋によると、勧告直前の主力400～0グラムサイズの内販価格は、キロ930～940円。シーズン最初期のおよそ1・5倍、昨年同月比では2倍超と欧州サバ業界としてはかつてない高値に直面している。足元では現地のシケの影響で水揚げが細って10月上旬の相場情報は入っていないが、かねてのアジアのサバ不漁・在庫薄や終盤の相場の上昇基調に、今回の勧告も重なって「さらなる上昇も否めない」状態にある。今後の漁についてはノルウェーの制度上、一部余剰枠を来年に持ち越すことも可能なため、業界関係者からは「来年の供給が極端に落ちることが確実視されている中、このまま枠を温存する選択をする漁船が多いのでは」という見方が多く、未消化のままシーズン終漁となる可能性が高まってきた。その中で注目が集まるのが、10月下旬めどに始まる英国のタイセイヨウサバ漁だ。日本が好むまき網主体のノルウェー産と違ってトロール物中心だが、買いの中心となってきた欧州勢がアイスランド漁の段階で「欧州が求める価格水準から大きく乖（かい）離していた」との情報もあり、高値で十分に原料が確保できなかった日本勢の関心も強い。ただ、これまで興味を示していなかった業者も買い付けに意欲をみせて「トロールがまき網物の相場を超えた昨年の構図に似ている」として高値スタートを予測する声もあり、依然として日本を取り巻く環境は厳しい。

搬入は11月から 早ければ11月末から新物の冷凍ノルウェーサバの搬入が始まる。加工業者からは「昨シーズン分のコストアップ分を満足に回収できていないのに先行きが思いやられる」「わずかな国内在庫が途切れれば急激に製品価格が上昇する。消費者はどこまでついてこられるのか」と心配の声が絶えず、国内有数のサバ加工拠点の業者も「輸入物に引きずられるように国内物も価格が上がっている。来年はさらに状況がひどくなることも考えられるため、倒産もあるが、今のうちに廃業を選択しようとしている同業がいるという話が複数ある」と緊迫した現状を伝える。

（次ページ左欄上に続きます）

漁獲国も混乱 日本の食卓に並ぶ半分以上を占めるともされる欧州サバ。国内では価格の話題でひっきりなしだが、タイセイヨウサバを漁獲するノルウェー、英国、アイスランド、欧州連合（EU）などの沿岸諸国では潤沢だった資源の減少という現実混乱が広がっている。勧告を受け、ある国の漁業者団体は直近10年にわたり沿岸諸国が勧告量を4割ほど超過してきた実態を踏まえ、資源保護のために団結を促す声明を発表。ただ違う国からは自国の水産業を守るには、最低でも勧告量のおよそ2倍、30万トンの漁獲の必要性を表明するなど、危機的な状況を前にしても生産者サイドの足並みは揃わず、今後の配分交渉に暗雲が立ち込めてきた。一方、消費面でも不安があり、海外メディアによると、オランダの大手スーパーマーケットは「乱獲」を理由にタイセイヨウサバの販売を中止する意向であると報道。さらに英国食品大手のプリンス社も、今回の勧告を踏まえて自社缶詰商品を同資源ではなくチリ産サバに変更する旨を発表するなど欧州らしい動きもあって、日本とは違う形で「サバ離れ」が進行しようとしており、この流れが広がるのかにも注視が必要となっている。

【さかなの動き】 チリ産ギンザケ 内販価格動きなく 10月後半に新物搬入本格化 （10月10日みなと新聞）

チリ産ギンザケ（冷凍ドレス）の内販価格は10月上旬、夏場から大きな変動はなく、キロ1100円前後で推移している。10月の相場について、「4／6ポンドサイズが1200～1100円ほど、6／9ポンドサイズが1120～1070円ほど」と商社筋。4／6ポンドよりも安価である6／9ポンドについては、「国内での末端価格が上がらないことには採算面で厳しい」との声も上がる。前年10月の相場（2サイズとも1100円弱）と比べるとやや高値であるようだ。チリ産ギンザケの新物の搬入は10月後半から本格的に始まる。

（右欄上に続きます）

ピークは11月～翌1月で、「10月初旬はヒネ物で回している状況」（商社筋）。財務省の貿易統計によると、直近（8月）の冷凍ドレスの日本への搬入は148トン。夏場の搬入は少ない傾向にあるが、単月で1000トンを超えるのはまれで、前年同月の5%ほどの取り扱いだった。今後の相場について、商社は「少なくとも11月までは今のままで推移するのでは」といい、「相場形成の目安となる中国・青島でのシーフードショーが10月末にある。日本以外の他国からの引き合いがどうなるか注視している」と話した。

サバ情報 ノルウェー漁船協会が勧告7割増の漁獲要求 MSCは枠の順守求める （10月14日水産経済新）

ノルウェー漁船協会（Fiskeribåt）はこのほど、2026年タイセイヨウサバ漁獲について、全体枠を最低30万6702トンに設定することを求める書簡を同国政府に提出した。国際海洋探査委員会（ICES）が通達した25年比7割減の17万4357トンを大幅に超過しているが、「（ICESの）削減勧告は資源量の実質的変化によるものではない」と強調している。同会としては、産卵親魚資源量の減少スピードなどを考慮し、60万トンを超えなければ同資源が減少しないなどと主張。

「資源回復はすべての関係者の利益になるが、回復プロセスで産業と市場が破壊されないことも重要。われわれはICESの勧告から逸脱する科学的根拠があると確信している」とオーダン・マーラク最高経営責任者（CEO）は述べている。ただ一方で、海洋管理協議会（MSC）はICESの発表を受け「資源量は危険的水準を下回っている。一刻も早く科学的根拠にのっとった漁獲枠の割当に合意しなければならない」と勧告の順守を求める声明を出した。**19年から認証停止** 同資源のMSC認証は、ICESの勧告を超過した漁獲が続いたことから19年から停止。

（次ページ左欄上に続きます）

MSCは従来から枠の配分で分裂状態にあるノルウェー、英国、アイスランド、欧州連合（EU）など沿岸諸国に改善を求めてきた。今回も「直ちに対策がなければ、資源が崩壊の危機に直面するのは科学的に明白だ。この極めて重要な資源とそれによって生活が支えられている漁業、地域コミュニティの未来を守るために各国が今すぐ行動を」とエリン・プリドルMSC北欧地域ディレクターは強調している。

【養殖 産地】養殖ブリ 1400円動きなし
鹿児島産 （10月14日みなと新聞）

鹿児島県内の養殖ブリの中心浜値は10月上旬、7月上旬から動きなく前年同月比500円高のキロ1400円（中心サイズ2～3キロ）で推移する。1尾サイズは例年より小ぶり。産地筋は「高水温による成長鈍化の状況が今後、一般化すると思われる」と指摘する。あるスーパーのバイヤーは「サイズの大小は店頭販売上、問題ない。現状に合わせブロックや刺身の販売割合を変えるなど、店頭販売のあり方を工夫していく」。今後の浜値について輸出筋は「国内サイズで輸出する動きが加速。国内向けと輸出をうまく両立させれば、産地が心配する今冬の浜値急落は起きない」と指摘する。

養殖マダイ 愛媛産 大サイズ品薄 愛媛県産養殖マダイの10月中旬の産地相場は、1・8キロアップが960円。大サイズの品薄を補う形で9月から1・8キロアップを950円に値上げしたが、現在はさらに10円値上がりし960円で取引されている。中心サイズはキロ930円。900円台の相場は2022年9月から38カ月連続になる。高水温や赤潮対策による餌止めなどでマダイの成長が遅れ大サイズが品薄状態になっている。今後マダイの成長に伴い、大サイズの品薄は解消に向かい、相場も安定するとみられている。一方、養殖マダイの8月の韓国向け輸出量は前年同月比29%増の575トン。

（右欄上に続きます）

金額は29・1%増の5億6794万円。平均単価は1円高の988円。1～8月累計は数量が前年同期比23・1%増の4047トン、金額は22・3%増の40億5990万円。 **養殖カンパチ 50円上昇 1750円 鹿児島産** 鹿児島県の養殖カンパチ主要産地の浜値は10月上旬、1750円（3・2キロ）が基準価格。前月からキロ50円値を上げた。前年同月比150円高の高値が継続している。産地筋は「1尾サイズは例年同月より500グラムほど小さい。冬季になっても多くが4キロに満たない可能性が高い」とみる。同産地では現在、種苗価格の高騰や経費増大からヒラマサやブリヒラへの魚種転換を進める産地が増えている。「薬浴など手間が多いカンパチ養殖は今後さらに減るだろう。カンパチの生産は浜値への理解がなければ継続できない魚となった」と話す。

【養殖 消費地】養殖カンパチ、ブリ 2000円
台 入荷減が続き高値 豊洲市場 （10月14日みなと新聞）

東京・豊洲市場では10月上旬現在、養殖カンパチと養殖ブリ（ハマチ）の入荷の減少傾向が続いている。産地では高水温の影響で、変形して水揚げされるケースがあり、処分率が懸念されている他、船による輸送リスクも高い。同市場ではキロ2000円台の高値での取引となっている。養殖カンパチの平均キロ単価は活締めがキロ2500円、野締めがキロ2000円で、いずれも前年同期比で2割高に。養殖ブリについては四国方面からの集荷に力を入れたが、「数量半減、値段は2倍という印象」と話す卸も。ただし、10月中・下旬からは鹿児島産の入荷が増え始めることから、「今後は相場が落ち着くか、横ばいでキープとなるのでは」という声もあった。一方、養殖マダイは10月上旬、前年同期並みの入荷ペースだった。活締め・野締めともに相場も安定。主産地は愛媛で1尾当たり1～2キロが中心。成育は順調で、入荷量と相場については、例年並みの水準が年末まで続く見通し。

（次ページ左欄上に続きます）

大阪本場 養殖ブリ相場100円上昇 浜値上昇が影響 大阪本場10月上旬の養殖ブリ（産地締め）のキロ当たりの中心相場は1800円で、前月上旬に比べ100円アップした。浜値が上がっており、相場を押し上げた。主な産地は高知と宮崎、鹿児島など。平均サイズは3～3・5キロ。天然ブリの入荷があり、高値安定の養ブリの引き合いは弱い。今後の相場は強含み。養ハマチ（活魚）は1900円で、保合いだった。浜値が上がったことに加え、出荷も限られる。平均サイズは3キロ前後で、主な産地は高知、徳島、鹿児島など。今後の相場はブリ同様強含みの見込み。養カンパチ（活魚）は保合いの2500～2100円。産地は高知、愛媛、鹿児島、宮崎、香川などで、平均サイズは3・5キロ。高値安定相場で、売れ行きは鈍い。今後の相場は保合いと見通す。養マダイ（活魚）の中心卸値は保合いの1350～1050円。平均サイズは1・5キロで、主産地が愛媛、高知、熊本、和歌山など。売れ行きは低調。今後の相場は強含み。

家計支出調査8月 魚介類実質減も下げわずか 潤沢サンマ、購入量倍増

（10月15日水産経済新聞）

総務省は7日、家計支出（家計調査報告、2人以上の世帯）の2025年8月分を発表した。消費支出全体は実質（消費者物価指数で補正して比較）前年比2・3％増と4か月連続で実質増となった。食料はコメの大幅減が響き3か月連続の実質減。魚介類は実質減が7か月連続に伸びたが、下げ幅はわずかだった。魚介類の支出金額は5953円で実質0・3％減と微減止まり。見かけ（名目）は2・4％増と6か月連続で増加した。内訳は生鮮魚介が3327円で実質4・5％増・名目6・3％増、塩干魚介が1041円で実質6・2％減・名目0・1％減、魚肉ねり製品が660円で実質2・4％減・名目0・2％減、他の魚介加工品が925円で実質7・4％減・名目5・5％減。生鮮魚介が一部魚種の久々の好漁に加え台風襲来がなく潤沢に出回り消費が特に進んだ。

（右欄上に続きます）

生鮮魚介類のうち金額で50円以上あり名目増減（以下のカッコ内はいずれも名目増減）で前年比増が目立ったのはサンマ（132・8％増）、サバ（30・2％増）、サケ（12・3％増）など。特にサンマは数量でも2倍に跳ね上がった。一方、支出金額が50円以上ある中で減少が目立ったのはホタテ（34・0％減）、ハマチ含むブリ（10・7％減）などだった。50円未満ではシジミやカレイ、カニなども大きく減った。塩干魚介の名目の増減はまちまち。塩サケは数量・金額とも増加する一方、シラス干は不漁が影を落とした。魚肉ねり製品では他の魚肉ねり製品が2ケタ増。他の魚介加工品では魚介の缶詰が逆に2ケタ減だった。後者は南海トラフ地震臨時情報（巨大地震注意）が発令された昨年の備蓄需要の反動とみられている。

外食寿司2000円台 そのほか外食の寿司が2013円（17・3％増）と2割近く増加している。月間2000円超えは近年最多となった。

【さかなの動き】生スジコ 札幌市場卸値2倍に 秋サケ空前の不漁で青天井

（10月15日みなと新聞）

北海道秋サケ漁が史上空前の不漁に陥る中、生スジコ市況も青天井だ。10月中旬の札幌市場卸値はキロ1万8000～1万4000円と、前年同期の2倍近くに跳ね上がる。道漁連日報によると、14日現在の累計漁獲量は前年同期比64％減の1万760トン。雌Bの産地相場は9月中旬のキロ1900～1500円中心から、現在は前年同期の2倍となる3000円前後、一部産地は4000円台に突入。様子見だった加工筋も買い付けせざるを得ず、一段高も予想される。今期の札幌市場の生スジコ取扱量、平均単価（キロ当たり）は8月6・6トン、8984円▽9月56・6トン、9183円と推移。10月は大きく前年を下回り、平均単価1万円超えはほぼ確実だ。近年の不漁でも1万円手前で踏みとどまっていたが、「この漁模様では圧倒的に物量が足りず、5桁も

（次ページ左欄上に続きます）

どうしても必要とする売り先につなぐのみ」
(卸担当者)と未経験の相場に戸惑う。東日本を中心に生スジコから作る自家製しょうゆ漬けは、秋の味覚を堪能できる風物詩。量販店の目玉商材だが、今期は生鮮コーナーでその姿を見かける機会は少ない。

総務省・家計調査分析 寿司の外食1割増 価格転嫁影響か 持ち帰りは足踏み状態 (10月16日みなと新聞)

総務省が毎月発表している家計支出(家計調査報告、2人以上の世帯)によると、2025年の「すし(外食)」の品目名で集計されている外食の寿司に対する支出金額は1～8月の累計で一世帯当たり1万1920円(前年同期比12%増)と大きく伸長した。直近の8月に限ると月間2013円に達し、初めて月2000円を突破した。新型コロナウイルス禍中も含めた過去5年平均との比較では26%増と増加幅はさらに大きい。ただ、背景には底堅い寿司人気に加え、人件費含むさまざまな現場経費の高騰分、直近ではシャリの値上がり分を転嫁したことによる影響が大きそうだ。細かくみると平月の伸びより年末年始や夏休み、大型連休などのイベントがある月の伸びが高く、実質賃金が伸びない中で、消費にメリハリを付けようという消費者意識が今まで以上に高まっている傾向がみられる。一方、「すし(弁当)」の品目で集計されている持ち帰り寿司に対する支出金額は1～8月の累計で一世帯当たり1万888円(3%増)と外食に比べるとわずかな伸びにとどまっている。経費の高騰分の転嫁を考えると停滞中といえる数字で、これまで小売の鮮魚・惣菜部門で売り上げ拡大の切り札となっていた持ち帰り寿司が転機を迎えている。うるう年からの反動減の側面があったにせよ、節分のある2月は22年以降で最も低い数字だった。恵方巻商戦は今後も拡大を続けるとの認識も改める必要がありそうだ。

(右欄上に続きます)

北海道秋サケ空前の不漁

(10月16日みなと新聞)

北海道秋サケ漁が空前の大不漁に陥っています。北海道漁業協同組合連合会がまとめた日報によると、6日現在の累計漁獲量は前年同期比58%減の8907トン。過去最低だった昨年の漁獲ペースを大きく下回り、最盛期のはずの10月上旬も水揚げは伸びていません。北海道連合海区漁業調整委員会が6日公表した9月30日現在の秋サケ沿岸漁獲尾数は、前年同期比48%減の317万1990尾。過去10年で最低のペースです。9月末時点で漁獲量が1万トン以下というのも例がありません。北海道漁業協同組合連合会がまとめた10月14日までの漁獲量は1万760トン。1万トンを超えましたが、前年同期に比べて64%少なく、依然として低水準です。産地相場も高騰しています。雌Bの相場は、9月中旬のキロ1900～1500円中心から、現在は前年同期の2倍となる3000円前後、一部産地は4000円台に突入しました。東日本を中心に秋の風物詩になっている生スジコの価格も高騰しています。10月中旬の札幌市場卸値はキロ1万8000～1万4000円と、前年同期の2倍近くに跳ね上がっています。この時期の量販店の目玉商材ですが、今期は生鮮コーナーでその姿を見かける機会は少ないといえます。

天然クロマグロ8割増 豊洲9月

国内生鮮大物 (10月16日みなと新聞)

時事通信社が集計した東京・豊洲市場9月の生鮮大物売り場、国内物の入荷本数は1724本と前年同月比で29・3%増加した。クロマグロの天然物が約1・8倍に増加したが、養殖マグロやメバチ、キハダはいずれも前年を下回った。クロマグロ全体の入荷本数は前年同月比50・8%増の1437本。このうち、天然物が1280本で76・1%増と増加が際立った。

(次ページ左欄上に続きます)

巻網物が782本（前年比316本）と約2・5倍に急増したのが主な要因で、内訳は主力の宮城・塩釜産が698本（同237本）、北海道の釧路沖からも84本（同79本）が入荷した。塩釜産は「八戸沖漁場が主体で、8月の千葉・銚子沖とは違う魚群」（卸会社）だという。巻網以外の延縄、釣、定置などの合計は497本（同409本）と21・5%の増加となった。主力の北海道産は、噴火湾の定置網物を主体に、戸井、厚岸、松前、吉岡、羽幌の延縄、釣物などが227本（同137本）と増加した。厚岸産は「漁場が岸寄りで豊漁なサンマを餌にした魚群がいるとみられ、身質の評価が良い」（卸会社）という。一方、大間や小泊など津軽海峡産延縄、釣物を主体とする青森産は228本（同255本）と減少。その他の産地は、高知産18本（同なし）、佐渡産11本（同）、京都・舞鶴産4本（同）、宮城産4本（前年同月3本）などで、いずれも少量だった。サイズ別のセリ値（発表値の平均）は、巻網物以外的大型（100キロ以上）がキロ当たり8116円で前年同月比7・8%安、中型（100キロ未満40キロ以上）が5644円で5・8%安、小型（40キロ未満）は2503円と6・3%安だった。巻網物は、大型が3181円と25・2%安、中型が2833円と7・7%安だった。塩釜産巻網物は夏場の高水温の影響が残る上旬、中旬を中心に「身質評価が悪くなった」（同）ことが相場にも響いた。延縄物も「（大間や戸井などの）太平洋漁場物の相場が伸びなかった」（同）ことで前年をやや下回った。月間の最高値は1日に入荷した大間産の延縄物（130・8キロ）で、2万円だった。養殖クロマグロのセリ場売りは157本（前年同月226本）と30・5%減少した。産地別の内訳は、主力の長崎産が113本（同169本）と落ち込み、高知産が11本（同23本）、三重産も6本（同8本）と減少幅が大きかった。

（右欄上に続きます）

一方、鹿児島産は26本（同13本）と増えた。セリ値は発表されなかったが、実勢取引価格は70キロ以上サイズがキロ3600～3400円、50キロ以上が3400～3300円、40キロ以下は3100円前後のもよう。メバチ全体の入荷本数は181本（前年同月239本）と前年同月比24・3%減少。主力の和歌山・那智勝浦産が105本（同5本）と増加したが、塩釜産は29本（同121本）、銚子産も31本（同93本）と前年を大きく下回った。発表されたセリ値の平均はキロ2538円と13・1%安だった。キハダ全体の入荷本数は106本（同141本）と前年同月の24・8%減少。内訳は、巻網物が86本（同87本）と前年並みで、産地別では銚子産が78本（同73本）、宮城・気仙沼産が8本（同14本）。巻網物以外では、高知産が14本（同13本）と前年並みだが、茨城・波崎産は3本（同31本）と大きく数を落とした。発表されたセリ値の平均は、巻網物がキロ1238円と19・8%高。巻網物以外は同1425円と6・7%安だった。（時事）

【さかなの動き】ノルウェーサバ 来期枠7割減
勧告 内販880円、さらに暴騰か （10月16日みなと新聞）

ノルウェー水産物審議会（NSC）によると、9月の冷凍ラウンドサバの輸出高は前年同月比18%減の5万2100トン、32%増の22億ノルウェークローネだった。主要輸出先国は、日本、ベトナム、中国。ノルウェーのサバ漁は8月から本格化し、9月末までに今期割当15万2000トンの約9割を漁獲した。NSCは「これほど早く、漁獲枠の9割を消化するのは異例。9月にノルウェー海で好漁が主因」と説明する。600グラム未満の冷凍ラウンドサバの輸出価格は前月比15%高の42・01クローネ（約628円）。「漁獲割当量の減少によるサバ供給不足により、今後も価格の上昇が続く」とNSC。

（次ページ左欄上に続きます）

国際海洋開発理事会（ICES）は9月30日、北東大西洋タイセイヨウサバの2026年勧告枠を25年比で7割減となる17万4357トンと公表し、業界に衝撃を与えた。今漁期のノルウェーサバの漁獲枠は前漁期比22%減の16万5298トン。今期の日本向けは3万トンを割る可能性も指摘され、10月上旬の日本の内販価格はキロ880円と過去最高値の更新が続く。さらに、来期の漁獲枠が大幅削減すればさらなる暴騰は必至で、今後の動向が注視される。

北海道秋サケ2万ト割れ濃厚、河川捕獲含め
最終700万尾程度か （10月20日水産経済新聞）

【札幌】北海道の秋サケ定置網漁の水揚げが2万トンを割り込む可能性が出てきた。道総研さけます・内水面水産試験場は今年の秋サケ来遊数を前年比35%減の1141万尾と予測したが、10月10日現在の沿岸漁獲尾数は391万尾台と前年同期比6割減という超スローペースで推移。同水試のト部浩一研究主幹は「中期（10月）以降の伸びが極めて悪い。最終的に沿岸漁獲で600万尾、河川捕獲も含めて700万尾に届くかどうかという水準で終わりそうだ」としている。

早くも終息ムード漂う 道漁連によると、10月15日現在の秋サケ水揚げ数量は前年比64%減の約1万1100トン。9月1日の水揚げ開始直後は日高など太平洋側を中心に前年を上回るペースの水揚げが続いたが、オホーツク海区や根室海区など量産地帯で本格的な操業が始まった9月中旬以降はペースダウン。日量1000トンを超えた日は9月23日の1日しかなく、10月に入っても一向に上向く気配をみせず、各地区、休漁日を挟みながら水揚げを続けているが、早くも終息ムードが漂っている。ト部主幹によると、今年9月の沿岸水温は、親潮の流入に伴い、平年より低い水温帯が形成された道東太平洋側と、9月下旬までサケの来遊に適さない24度C以上の水温が続いた日本海南部地区を除き、おおむね前年並みに推移したという。

（右欄上に続きます）

今年の全道的な水揚げの極端な減少はオホーツク海区と根室海区の来遊不振が大きく響いているが、両海区の来遊に影響を及ぼすことで知られる知床半島周辺の9月の100メートル深水温は、昨年同様、平年より低めに推移し、来遊時の沿岸環境としては決して悪くなかった。ト部主幹は「水温条件が整っている中で両海区の漁獲が全然伸びなかったということは、資源自体が相当薄かったということ」と強調する。事実、前期の来遊資源（9月末現在暫定値）の年齢を調べたところ、特にオホーツク海区や根室海区など、予測値が前年を大きく下回る地区では予測通り主群となる4年魚の出方が悪いという。その要因について、ト部主幹は「放流時の海洋環境が大きい」と指摘する。今年の4年魚（2021年級）が降海した22年春のオホーツク東部・中部地区の沿岸水温は5月下旬に急激に低下したあと、6月中旬に急激に上昇したため、稚魚にとっての適水温期間が短くなり、資源の減少につながった。根室海区も同じような環境にあったと指摘する。

3年魚の伸びも期待薄 今年の3年魚（22年級）の来遊はまだ見通せないが、放流した23年春の沿岸環境は適水温期間が平年より早く始まって早く終わり、さらに短くなった。根室海区も同じような環境にあったという。ト部主幹は「水温だけでなく、餌のプランクトン量も過去最低水準で、相当ダメージを受けている可能性がある」と推測。放流時の海洋環境だけで考えると、今後3年魚の伸びも期待できない状況だ。10月10日現在の沿岸漁獲は重量にして約1万1600トン。最終的に1万8000トンから1万9000トンまで積み上がるかどうかといったところ。ト部主幹は「悲観的な見方になるが、4年魚と同じような要因で3年魚が少なかったとしたら、来年はもっと大変な年になるだろう」とみている。

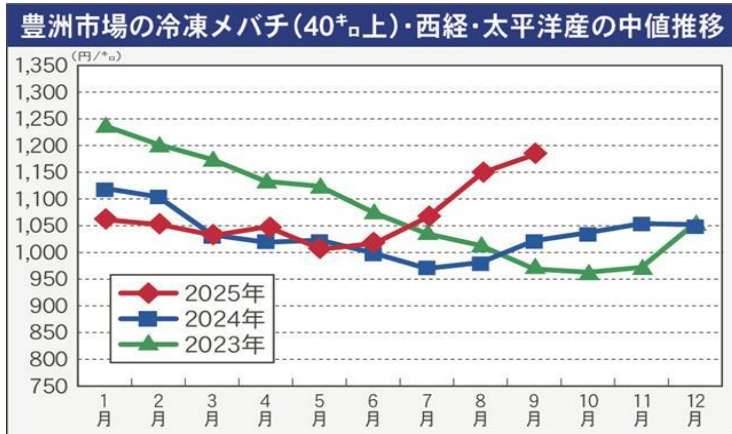
70年代前半の水準まで減少 今年の秋サケ来遊数が仮に700万尾程度まで減少するとすれば、10億尾放流開始前の1970年代前半の水準まで落ち込むことになる。

（次ページ左欄上に続きます）

ト部主幹は「全道的に資源減少傾向が続く中、一定水準を保ってきたオホーツク海ですら、海洋環境の変化の影響を強く受けるようになってい」と危機感を強めている。

マグロ情報 豊洲9月 メバチ減少で高値続く
中バチも4ケタ相場へ突入

(10月20日水産経済新聞)



豊洲市場における9月の冷凍大バチ(40キロ上)の上場本数は9687本だった。昨年同月の1万1782本から18%の減少で、2か月連続で1万本を割っている。相場は西経・太平洋銘柄の公表値キロ当たり中値が1185円(前年同月比16%高)となり、急騰した8月の1150円から続伸。中バチ(39キロ以下)も1017円(39%高)で、ついに4ケタ相場へ突入した。(グラフ参照)

「安いマグロから順に値上がりしている」と、関係者は漏らす。キハダは8月に、中バチは9月に中値が1000円台へ突入した。中バチの4ケタ相場は2023年3月以来。近年で冷バチが最高値だった22年末の余韻が残る頃までさかのぼる。年末商戦および新物が到着する年明けまで、在庫を切らすわけにはいかず、関係各社は原料の囲い込みに苦戦している。補完役となる冷キハダとカツオも、不足感が否めないのが実態だ。赤身全体の品薄感と急激な価格上昇により、値頃な中バチを求める動きが活発になった。大バチも底高の価格形成が色濃くなっている。冷バチ不足の影響からか、冷ミナミマグロにも変化がみられた。

(右欄上に続きます)

39キロ以下の小銘柄の中値は、9月が1643円(10%高)で、8月の1458円から急激に上昇した。シドニー漁場で3~4月に漁獲された個体は、大銘柄を上回る品質とされている。扱いやすいサイズなうえ、ミナミマグロの難点である色変わりも遅いという。冷バチの代替品としての需要は、それなりにあったと考えられる。

塩釜まき網クロ口急増 生鮮は国産天然クロマグロが1280本(76%増)で、まき網物が782本(147%増)を占めている。宮城・塩釜産が698本(195%増)へ躍進したためだ。ただし、キロ当たりセリ値(発表値の平均)は、大型(100キロ以上)が3181円(25%安)と苦戦した。漁場には高水温の影響が残っており、特に上旬~中旬は脂が薄かったそうだ。国産の良品不足のためか、輸入生鮮クロマグロの相場が底堅かった。中値はカナダ産(208本)が5487円(3%高)、ボストン産(147本)は5577円(14%高)だった。ただしセリ残の並品には、極端な安値もあったという。

インド洋一船買い 台湾大バチ相場1000円
超え 搬入減と年末商戦重なる

(10月20日みなと新聞)

冷凍メバチ相場の指標となるインド洋台湾船一船買い相場は10月中旬現在、1本40キロ上の大バチは先月同時期から50円高のキロ1000円台で推移する。11月中旬ごろまで赤身の搬入量は少ない見通しで、「年末需要も相まって続騰している」と東京・豊洲卸。大バチ相場が1000円台を記録するのは2023年2月以来となる。大バチ相場は、新型コロナ禍の出漁控えによる原料不足で21年夏ごろから高騰し、ピーク時の22年7月には1150円を付けた。その後は高値による末端の「マグロ離れ」に生活コストの高騰が重なり、消費は滞留して在庫が滞留した。24年8月には750円まで下落した。地中海養殖物も含めた在庫過多は運搬船の水揚げに悪影響を及ぼした。極端な相場安は、遠洋延縄船の漁家経営に関わる。

(次ページ左欄上に続きます)

24年12月には生産者支援の側面から、大手商社がキロ800円に値上げした。今年に入り冷凍赤身商材の在庫整理は進み、6月以降の大バチ相場は上昇基調にある。豊洲卸によると、10月後半に運搬船が入港するが「外貨船のため現時点で中身は分からない」という。11月半ばに中部大・西洋の赤身商材が搬入される予定で、「需給に衣服感が出れば」と期待する。別の関係者は「年末商戦の原料調達が一段落すれば、上げ相場も落ち着くのでは」と話す。インド・台湾船一船買い相場のうち、25キロ上はキロ800円、15キロ上は700円、10キロ上は600円。キハダは25キロ上は800円、15キロ上は700円、10キロ上は600円の保合いだ。

冷凍カラスガレイ 内販高値維持
販売は引き続き低調

(10月20日みなと新聞)

10月上旬の冷凍カラスガレイの0・5～1キロドレスの内販価格（関西の商社出し値）は、前年同期比約1割高の1400円と高値を維持している。商社筋は「国内の荷動きが悪く値上げが少し遅れているため、ここ数カ月の内販価格はあまり変わっていないが、浜値の上昇などで1500円が見えてきている」と説明する。商社筋によると各産地の水揚げ状況が悪くドル価が徐々に上昇しているという。「浜値が上がり続けている状況に日本は売価が追いついておらず、各社は最新の単価で買い付けできていない」と嘆く。主な販売先の量販店は夏場の影響で9月まで伸び悩み、販売は引き続き低調と商社筋。今後については、「寒くなるにつれて需要は高まる見込み。ただ、年末ごろに終漁する国もあるため、下げ相場を迎える可能性は低いだろう」とみる。

貿易統計によると、今年1～8月の冷凍カラスガレイ輸入量は前年同期比4%減の5788トン。輸入先はカナダの2096トンが最多で、ドイツ、ノルウェー、グリーンランドが続ぎ、スペイン、アイスランド、ポルトガルからの輸入も目立った。

故伊藤裕康氏に正五位

卸業界の発展尽力 (10月20日みなと新聞)

9月7日に死去した故伊藤裕康氏（中央魚類最高顧問、元代表取締役会長）は、社業ならびに水産卸売業界の健全な発展に尽力した功績により、同日にさかのぼり「正五位」に叙された。10月17日に農林水産省で叙位伝達があり、妻の伊藤美代子さんと長男の晴彦氏が出席した。河南健同省大臣官房総括審議官（新事業・食品産業）から位記が手渡された。伝達式後、晴彦氏らは河南総括審議官との間で、生前の裕康氏との思い出話などを交わしたという。叙位にあたり、晴彦氏は「父が活躍させていただいたことに評価を頂き、家族として、息子としてありがたい気持ち」と話した。美代子さんは「皆さんに大変お世話になり、親切にさせていただき恐縮」と述べた。全国水産卸協会によると、伝達式には他にも同省新事業・食品産業部長の高橋一郎氏、食品流通課長の原田達氏、卸売市場室長の鈴木裕氏、水産庁漁政部加工流通課長の久納寛子氏らが出席した。

【さかなの動き】アカウオ 内販70円上昇500円
アラスカ産 中国買い気高まる (10月20日みなと新聞)

米国アラスカ産アカウオドレス400／500グラムサイズ内販キロ単価は8月、500～490円ほどに上がった。それまでの3年間、430円で横ばいだったが、「中国の買い気が非常に高まった」（商社筋）ため。中国の買いは、一昨年は下火だったが、昨年は例年並みとなり、今年に急上昇。「中国の加工業者は大規模なインフラや従業員を抱える。世界的に加工向けの多獲性魚種が減産したり、値上がったりする今も、業務は止められない。アカウオも『高くても仕方ない』と買われた」（同）。日本の対米輸入量は近年、年1万トン前後で推移。今年も昨対比で産地漁獲枠は減っていないが、中国に量が回った分、「肌感覚では輸入が半減してもおかしくない」（同）。日本国内の加工場などでは品薄感が高まり、「来年まで現状の在庫を売る格好で、価格も据え置きとなりそう」（同）。

中国加工品は「欧州輸出も徐々に増えているが依然、対日輸出が主。今年の中国には2割高い原料が数千トン入り、日本の加工場と異なる工程にもコストがかかる。日本市場で売り切れる製品価格になるか不明」（同）。売れ行きの良しあし次第で、今後の買い付け意欲も左右されそうだ。

サケ・マスなどの冷凍卵輸入

8月 単価2倍 5048円 (10月20日みなと新聞)

財務省貿易統計によると、8月のサケ・マス卵主体とされる冷凍卵（ニシン卵、タラ卵を除く）の輸入量は前年同月比2倍の529トンでした。平均単価は2倍のキロ5048円となっています。このうち米国からは、輸入量が2・4倍の507トン、単価が97%高の5176円でした。今期の輸入サケ・マス卵は供給が増える見通しですが、相場は全般的に高騰するとみられます。米アラスカ産の冷凍ベニサケ卵やマス卵は前年を上回る高値水準で推移しており、商社筋からは「積極的に消費を促せる価格ではない」との声も聞かれます。一方のロシア産冷凍ベニサケ卵については前期同様に輸入量は少ないまま。商社は「ベニサケの漁獲が不漁というわけではなく、ロシア国内向けとして需要が大きい」とし、供給増ながら高値オフアが明らかとなっているマス卵を含め、「あえて日本に売らなくてもよいといった姿勢から値頃感はない。国内ユーザーは様子見しているのが現状」と話します。生スジコの価格も高騰しています。北海道秋サケ漁が史上空前の不漁に陥る中、10月中旬の札幌市場卸値はキロ1万8000～1万4000円と、前年同期の2倍近くに跳ね上がっています。今期の札幌市場の生スジコ取扱量、平均単価（キロ当たり）は8月6・6トン、8984円、9月56・6トン、9183円と推移。10月については取扱量が前年を大きく下回っており、平均単価1万円超えはほぼ確実とみられます。

近年の不漁の中でも単価は1万円手前で踏みとどまっていましたが、卸担当者は「この漁模様では圧倒的に物量が足りず、5桁も仕方ない。どうしても必要とする売り先につなぐのみ」と未経験の相場に戸惑いをみせます。

【さかなの動き】タコ アフリカ産 年末向け搬入限定的 夏漁買付慎重 (10月20日みなと新聞)

西アフリカ産マダコの夏漁物の買い付けは低調のようだ。価格の高騰や国内消化の鈍化に円安の進行が重なり、国内への搬入は前年から減少する見通し。年末向けも限定的とみられる。商社筋によると、モーリタニアではつぼ漁を中心とした陸凍品の日本向けが1000トンほど。サイズは小型の7番が中心で、一部で関東での年末の酢ダコ需要から4番など大型の買いも進んだ。モロッコは漁獲枠が前年からほぼ半減したこともあり、漁獲の伸びは期待できないという。国内のスーパー・量販店では高値のためアフリカ産ボイルダコの販売は低調に推移し、需要期の年末は在庫での対応が増える見通し。一部の年末需要を除いて夏漁物の買い付けは、冬漁物の国内搬入が始まる来年春までの在庫に不足感のあるケースなどに限られそうだ。冬漁はモロッコが12月15日まで禁漁のため同月後半以降、モーリタニアは11月中旬以降の解禁が予想される。国内では近年、マダコの主産地となっている三陸地方で9月に漁がスタートしたが、主力となる宮城・石巻の同月の水揚量は前年同月の半数ほどと低調な出だしとなった。最盛期となる11～12月の巻き返しが期待される。

9月の輸入生鮮大物 豊洲 インドマグロ 豪州産は底堅い カナダ産クロマグロ、良品減る (10月23日水産経済新)

（株）時事通信社が集計した東京・豊洲市場9月の生鮮大物売場、輸入物の入荷本数は1305本（前年同月1127本）で前年同月比約16%増加した。

マグロ（クロマグロ）は減少したが、天然インド（ミナミマグロ）とメバチが増加した。マグロ全体の本数は413本（前年同月496本）で16・7%減少。天然物で主力のカナダ産は208本（218本）とわずかな減少だったが、ボストン産は147本（218本）と3割以上減少した。カナダは6月の漁期入り以降、積極的に日本と欧州方面への輸出を継続してきたが、米国は自国の需要を優先したとみられる。オセアニア方面は、豪州産が23本（18本）とニュージーランド（NZ）産が10本（前年同月12本）でほぼ前年並み。このほか、はえ縄物のノルウェー産が4本（入荷なし）あった。養殖物のメキシコ産は21本（30本）で、わずかに減少した。セリでは、カナダ産の高値はキロ1万円（8500円）で、平均値は5487円（5300円）と前年を上回った。ただし、「脂乗りと身色両面でよい品は少なく、病変も目立つ」（仲卸業者）と、品定めに慎重な声が聞かれ、セリ残りの並品の中には2000円程度の安値処分もあったもよう。豪州産は、漁獲の最盛期は過ぎているものの、11日に入荷した6本は格別に評価が高く、高値に国内のはえ縄物に匹敵する8200円（前年同月4900円）が付き、平均値も4687円（4050円）に上昇した。養殖物のメキシコ産は全数の相場が未発表。30キロ前後の小型が目立った前年から一転し、80キロ前後の大中型主体で入荷した。販売面では、競合品である国内養殖物に同等のサイズが少なかったこともあり、おおむね2600円前後で順調に買い手が付いた。インドは天然物のみで、全体で801本（585本）と36・9%増加。主力の豪州産は648本（427本）、ケープタウン産も111本（85本）と増えたが、NZ産は42本（73本）に減少した。豪州産は最盛期を過ぎていることから、身質評価は総じて厳しいものだったが、冷凍メバチなど、競合する赤身商材が値上がり傾向にあることから、値頃感のある商材として量販筋や中小規模の仲卸業者からの需要は根強く、セリ残りは少なかった。

（右欄上に続きます）

ただし、相場発表されたのは19本のみで、3000円未満の並品は発表されなかった。平均値は4168円（2893円）と、数字上は1300円近く上伸したことになるが、実際のところ大半が2000～1000円台の安値圏で買われたケースが多かった。ケープタウン産は、豪州産と比べて身質評価は高く、高値は8200円（5000円）、平均値も3770円（3426円）と堅調だった。

メバチは全体で86本（28本）に増加。主力の豪州産が78本（15本）に増加したほか、ケープタウン産4本（13本）、カナダ産4本（入荷なし）もあった。豪州産は大半が10キロ台の小ダルマサイズで販売は苦戦。相場発表も全数不成立となった。

9月の国内生鮮大物 豊洲 塩釜産巻網クロマグロ急増、メバチ・キハダは下回る （10月23日水産経済新聞）

（株）時事通信社が集計した東京・豊洲市場9月の生鮮大物売場、国内物の入荷本数は1724本で前年同月比29・3%増加した。マグロ（クロマグロ）の天然物が約1・8倍に増加したが、養殖マグロやメバチ、キハダはいずれも前年を下回った。マグロ全体の入荷本数は50・8%増の1437本。このうち、天然物が1280本で76・1%増と増加が際立った。まき網物が782本（前年同月316本）と約2・5倍に急増したのが主な要因で、内訳は主力の宮城・塩釜産が698本（237本）、北海道の釧路沖からも84本（79本）が入荷した。塩釜産は「八戸沖漁場が主体で、8月の銚子沖とは違う魚群」（卸会社）だという。一方、まき網以外のはえ縄、釣り、定置などの合計は497本（前年同月409本）で21・5%の増加となった。主力の北海道産は、噴火湾の定置網物を主体に、戸井、厚岸、松前、吉岡、羽幌のはえ縄、釣り物などが227本（137本）と増加した。厚岸産は「漁場が岸寄りで豊漁なサンマを餌にした魚群がいるとみられ、身質の評価がよい」（卸会社）という。

（次ページ左欄上に続きます）

一方、大間や小泊など津軽海峡産はえ縄、釣り物を主体とする青森産は228本（前年同月255本）と減少。このほかの産地は、高知産18本（なし）、佐渡産11本（なし）、京都・舞鶴産4本（なし）、宮城産4本（3本）などで、いずれも少量だった。サイズ別のセリ値（発表値の平均）は、まき網物以外の大型（100キロ以上）がキロ8116円で前年同月比7・8%安、中型（100キロ未満40キロ以上）が5644円で5・8%安、小型（40キロ未満）は2503円で6・3%安だった。

まき網物は、大型が3181円で25・2%安、中型が2833円で7・7%安だった。塩釜産まき網物は夏場の高水温の影響が残る上旬、中旬を中心に「身質評価がよくなかった」（卸会社）ことが相場にも響いた。はえ縄物も「（大間や戸井などの）太平洋漁場物の相場が伸びなかった」（同）ことで前年をやや下回った。月間の最高値は1日に入荷した大間産のはえ縄物（130・8キロ）で、2万円だった。養殖マグロのセリ場売りは157本（前年同月226本）と30・5%減少した。産地別の内訳は、主力の長崎産が113本（169本）と落ち込み、高知産が11本（23本）、三重産も6本（8本）と減少幅が大きかった。一方、鹿児島産は26本（13本）と増加した。セリ値は発表されなかったが、実勢取引価格は70キロ以上サイズが3600～3400円、50キロ以上が3400～3300円、40キロ以下は3100円前後のもよう。メバチ全体の入荷本数は181本（239本）で24・3%減少。主力の那智勝浦産が105本（5本）と増加したが、塩釜産は29本（121本）、銚子産も31本（93本）と前年を大きく下回った。発表されたセリ値の平均は2538円と13・1%安だった。キハダ全体の入荷本数は106本（141本）で26・8%減少。内訳は、まき網物が86本（87本）と前年並みで、産地別では銚子産が78本（73本）、気仙沼産が8本（14本）。

（右欄上に続きます）

まき網物以外では、高知産が14本（13本）と前年並みだが、茨城・波崎産は3本（31本）と大きく数を落とした。発表されたセリ値の平均は、まき網物が1238円で19・8%高。まき網物以外は1425円で6・7%安だった。

マグロ情報 三崎9月 単価 1177円

ジリ高続く

（10月23日水産経済新聞）

【三崎】三浦市三崎水産物地方卸売市場が公表した三崎魚市場における9月の冷凍メバチの平均単価は、キロ1177円で前年同月比26・4%高、取引数量は383・8トンで9・3%減だった。一日当たりの平均上場本数は310本、1か月間の合計は6197本で8・7%減となった。8月の平均単価1158円から1・6%高。今年初めて1000円台になった7月以降、ジリ高傾向にある。取引数量は8月の304・1トンに比べ26・2%増、1か月の上場本数は22・4%増えた。三崎漁港への遠洋マグロはえ縄船の入港は2隻だった。

養殖ブリ 高値の販売に創意工夫

成育遅れも生産尽力

（10月22日みなと新聞）

空前の浜高が続く今期の養殖ブリ。まもなく年末をピークとする需要期本番に突入するが、今年は水温の影響などで成長が遅れ、魚体は総じて小ぶりだ。当面の供給量が限られるため、浜値は空前の高値水準で推移。魚の価値を消費者に伝えるための工夫が求められる。一方、養カンパチは生産量が頭打ちとなり、浜値は右肩上がりが続く。こうした中、量販店ではブリヒラやスギといった新たな養魚の販売に着手する動きもみせている。年末の主要魚の代表格である養殖ブリの“異常”と言っても過言ではない事態に対し、業界関係者はどのように対応していくのか。大消費地の卸売市場や量販店の販売計画、輸出業者の対応を中心に、生産、流通、飼料、資材など関連事業者の取り組み、動向取材した。

（次ページ左欄上に続きます）

豊洲市場 ㊦ 2000円台で張り付く カンパチは2割高

東京・豊洲市場における養殖ブリ（ハマチ）の中心卸値は10月上旬、野締め（産地締め）がキロ2000円ほど、活締め（消費地締め）が2200円ほどで推移する。前年10月は1500円前後。今春に2000円を超えてから高値張り付きで、卸は「異例の相場が続いており、首都圏の量販店からの引き合いは厳しい」と口をそろえる。高値に伴い、10月上旬の荷動きは鈍く、「入荷量半減という印象」と卸。他の卸では「3割減ほどでとどまっている」と話す。ただし、10月下旬ごろからは鹿児島産の入荷が本格化する見通しであることから「今後の相場は、横ばいでキープするのでは。年末に向けて量を売っていききたいという方針は昨年と変わらない」との声もあった。

養カンパチの中心卸値は10月上旬、野締めが2000円ほど、活締めがキロ2500円ほどで、いずれも前年同期比で2割高に。入荷量は前年同期比で3割ほど少ない。「相場は養ブリほどの上がり幅ではないものの、商品価値を顧客にいかに伝えるかが重要になってくる」と卸。

大阪本場 取扱量、大幅減見通し 特に6㊦台の

入荷薄 大阪市中央卸売市場本場（大阪本場）の年末商戦の養殖ブリ（ラウンド・フィレー）の取扱量は前年同期に比べ4割減前後と大きく下回りそうだ。一方、養カンパチ（活魚）は、相場に関係なく、飲食店や外食産業からの一定の需要がある。そのため、取扱数量の減少幅は養ブリに比べ小さそうだ。養ブリは在池量不足、成育遅れなどによる浜値の高騰が影響し、高値安定相場を形成している。10月中旬の中心相場は1900～1800円。12月に向け相場は、保合いか小高いと見通す。また、現在は3～4キロ台が中心だが、11月に4～5キロ、12月には5キロ台になりそうだ。6キロ台については、成育遅れや産地サイドが輸出向けに優先し出荷するようで、市場への入荷は少なさそう。量販店・スーパーは高値相場で販売に力が入らない。12月以降の販売計画を立てにくい状況だ。養殖カンパチ（活魚）は色変わりが遅いなど、飲食店などから根強い一定の需要がある。養殖ヒラマサやブリヒラは取り扱いが一部ある。ただブリの代替にはならない

（右欄上に続きます）

カナダ産クロマグロ良品減 豊洲9月輸入

生鮮 大物 セリ残品は安値処分も （10月22日みなと新聞）

時事通信社が集計した東京・豊洲市場9月の生鮮大物売り場、輸入物の入荷本数は1305本（前年同月1127本）で前年同月比約16%増加した。クロマグロは減少したが、天然ミナミマグロとメバチが増加した。クロマグロ全体の本数は413本（前年同月496本）で16・7%減少。天然物で主力のカナダ産は208本（同218本）とわずかな減少だったが、ボストン産は147本（同218本）と3割以上減少した。カナダは6月の漁期入り以降、積極的に日本と欧州方面への輸出を継続してきたが、米国は自国の需要を優先したとみられる。オセアニア方面は、オーストラリア産が23本（同18本）とニュージーランド（NZ）産が10本（同12本）でほぼ前年並み。この他、延縄物のノルウェー産が4本（同入荷なし）あった。養殖物のメキシコ産は21本（同30本）で、わずかに減少した。

ねり7%増産 2.9万ㄲ

8月 揚げカマボコけん引

（10月22日みなと新聞）

食品需給研究センターが公表した8月のちくわ・かまぼこ類推定生産量（推計速報値）は、前年同月比6・7%増の2万8570トンだった。揚げかまぼこが7・8%増の1万455トンとけん引した。カニ風味かまぼこを含む「他かまぼこ」は6%増の8022トン、ちくわは8・3%増の4605トン、板かまぼこは7・7%増の2893トン、なると・はんぺんは0・8%増の2059トンだった。4品目と揚げかまぼこは今年に入り8カ月連続の増産。包装かまぼこは2カ月連続の増産で、2・3%増の536トン。1～8月累計のちくわ・かまぼこ類生産量は前年同期比13・3%増の26万1385トン。全品目で前年同期を上回った。なお、前月までのデータは農林水産省が8月に公表した2024年の水産加工統計調査の生産量に合わせて修正しているため、全ての項目で前年同月比の増減率が変動している。

（次ページ左欄上に続きます）

昨年食べた鍋 紀文主婦調査 おでん27年 連続1位

(10月22日みなと新聞)

最大手ねりメーカーの紀文食品（東京都中央区）がこのほど発表した2025年度版「鍋白書前編」によると、全国の20代以上の主婦1400人に対し、昨年の秋冬に家庭で食べた鍋料理を複数回答で尋ねたところ、1位は「おでん」で回答率56・8%だった。これで27年連続のトップ獲得。エリア別でも、全7地域でおでんが首位だった。同社は調査会社のマクロミルと共同で8月18～20日、全国の主要7地域に住む20代以上の既婚女性1400人を対象に、インターネットを通じて各家庭の鍋料理の実態などを調べた。1400人のエリア別の内訳は北海道、宮城、東京、愛知、大阪、広島、福岡の各都道府県200人ずつで、各地の年代別内訳は20代、30代、40代、50代以上がそれぞれ50人。昨年の秋冬に家庭で食べた鍋料理の出現（喫食）率の2位は「キムチ鍋」（回答率44・9%）で、3位は「すき焼き」（43・6%）、4位は「しゃぶしゃぶ」（40・9%）、5位は「寄せ鍋」（40・4%）と続いた。年代別でみると、30代以上の1位はいずれも「おでん」だったもの、20代のみ1位は「キムチ鍋」（50・1%）となり、2位の「おでん」（45・4%）を抑えてトップに立った。なお、20代の3位は「しゃぶしゃぶ」（35・6%）、4位「すき焼き」（33・5%）、5位「寄せ鍋」（33・2%）の順。20代に好きな鍋料理を尋ねたところ、1位は「キムチ鍋」（60%）、2位は「おでん」と「しゃぶしゃぶ」が回答率52・6%で並んだ。前年度の同ランキングと比べると、「おでん」が4位から2位にランクアップした。紀文食品は「特に20代では昨年の調査結果と比較すると、どの鍋料理も割合（回答率）が下がっていたことに対し、おでんは数値を維持している結果となった。若者からの支持も変わらず厚く、時代の移り変わりにも影響されず、定着している様子が見えてくる」と分析する。

(右欄上に続きます)

流通3団体販売統計25年9月

水産は前年比2%増加 (10月24日水産経済新聞)

食品スーパー（SM）が主体の流通3団体が21日に発表した「スーパーマーケット販売統計調査」2025年9月実績によると、総売上高は既存店前年同月比102・4%の1兆730億3448万円となり、31か月連続で前年同月を上回った。水産部門は875億2790万円（102・0%）で、3か月連続の前年超え。生サンマや生イカの水揚げが多く、特に高品質だったサンマは売り上げを大きく伸ばした。猛暑により、海藻類などサラダ用商材やウナギも動きがよかった。不漁により高値で推移したシラスやカツオ、秋サケなどは苦戦した店舗が多かった。貝類、干物類、魚卵・塩干類や、マグロなど刺身類も伸び悩んだ。食品合計は9878億2164万円（102・7%）、生鮮3部門合計は3619億3361万円（101・3%）。高温の影響で相場が上昇し、品薄や品質低下に悩まされた青果は1540億4501万円（100・9%）、牛肉の不振と豚肉・鶏肉への需要シフトが継続している畜産は1203億6070万円（101・3%）となった。猛暑から残暑も長引き、家庭での調理を避ける傾向が追い風となり、揚げ物類が好調だった惣菜は1212億5077万円（103・4%）だった。

東京鮭鱒9月 高値続き販売伸びず 塩蔵より 冷凍が高い矛盾

(10月24日水産経済新聞)

東京都中央卸売市場9月のサケ・マス販売は、空輸中心の生鮮は値下がりして販売数量を増やしたが、冷凍と塩蔵は高値が続いて販売量を大きく落とした。主力のチリギンやベニでその傾向が顕著だった。

【生鮮】空輸が大きく回復したほか、季節商材のシロザケが急増し、生鮮全体の販売量は9月としては2年ぶりに900トンを超えた。輸入は396トンで、高値に苦戦した前年同月を55・5%上回るまとまりをみせた。 (次ページ左欄上に続きます)

過去3年、池出し価格の高値が続いていたことで、月間400トン近くまとまるのは近年では異例となった。その代わり販売単価はキロ1716円と安く、前年の27・6%安まで値下がりしている。ただ、主力ノルウェー産の池出し価格は9月以降再び値上がり傾向をうかがわせていることで、最近の円安基調と合わせて今後は空輸にややブレーキがかかる可能性も予想される。国産は北海道の秋サケ解禁で例年通りシロザケの出回りが急増した。前年同月に比べて1割以上少ない259トンにとどまったが、販売単価は1596円で6・2%の値下がりですスタートした。

【冷凍】全体の8割を占めるチリギンが、再び値上がり傾向をうかがわせたことで減速を強め、全体の販売量の低下が続いた。冷凍全体では955トンと6か月ぶりに1000トンを下回り、単価は1488円で1500円前後の高値が続いた。チリ産主体のギンは762トンの販売で、前年同月を11・7%下回り、これにより1割以上の減少は8か月続いていることになる。1～9月累計では単価の26・8%高に対して販売数は24・6%減少しており、累計平均では約300円アップにより約2700トンの減少につながっている。ロシア産主体とみられるベニも流通量の減少により販売量はわずか11トンまで急減し、マスやスケ（キング）よりも少なくなった。全体的な出回りの縮小で販売単価は高値が続いており、販売量の漸減が顕著になった。

【塩蔵】原料価格の上昇で塩蔵製品の価格も当然値上がりしており、シロ以外は月間・累計ともすべて前年より値上がりしている。9月はギンを中心に453トンで前年より9・1%少なく、平均単価は1389円で5・9%高かった。主力のギンは4・7%減の361トン、6・8%高の1373円で、冷凍ほど前年との開きは少ないが、問題なのは冷凍の平均単価（1406円）より塩蔵（1373円）の方が安いこと。これはギンだけでなく、その他の魚種にも当てはまることで、このインフレの時代に原料より製品が安いという流通上の矛盾が露呈したままになっている。

(右欄上に続きます)

東京魚卵9月 減産高値のイクラ混乱必至に
スケコ、カズノコも高値

(10月24日水産経済新聞)

東京都中央卸売市場9月の塩蔵魚卵販売は、味付けカズノコを除いて軒並み高値が続き、販売量の落ち込みが続いた。

【筋子】流通量の急減と原卵価格の高騰で、製品価格は急上昇している。月間販売量が17トンと引き続き低調なのに対し、平均単価はキロ4909円と5000円に迫り、昨年10月の4707円を上回って近年の最高値を更新した。

【イクラ】近年最高値を記録した8月の8888円に比べると安くなったが、それでも5月以降の8500円台を下回ることとはなく、販売量も増加した。しかし、10月以降は秋サケの不漁が顕著になったため、価格も入荷も激変する可能性があり、暮れに向かって混乱必至の情勢となっている。

【スケコ】単価の上昇でギリ貧が続くスケコだが、7月以降の2100円台が9月も続き、販売量は22・0%減と減少が募った。単価高による数量減は2年以上続いており、1～9月累計では前年同期に比べて9・7%の値上がりに対して販売量は16・0%も減少している。全体の市場縮小につながっている状況だ。

【明太子】同じ原卵でも明太子は値上がり率も減少率もスケコより小幅なものにとどまっているが、8月以降は単価の上昇が優勢になり、販売量の減少が目立つようになってきた。ただ、1～9月ではほぼ前年並みの単価にして小幅な減少にとどめており、スケコより200円以上高く、販売量も8割以上多い1288トンまで積み上がっている。

【塩カズノコ】暮れの本格商戦を前に出回りはまだ少ないが、原卵価格の上昇で単価は高く、これまでの増加傾向にブレーキがかかった。

端境期の1～9月が終わった段階で154トン、平均単価3055円で推移しており、単価が小幅に下げて販売量は7・6%の伸びをみせている。

(次ページ左欄上に続きます)

【味付カズノコ】同様に9月の販売数量はまだ少ないが、前年の異例の高値を下方修正しながらも扱いは前年並みにとどまった。累計では4割安に対して4割増と販売量を増やしている。

【さかなの動き】 上乾チリメン 卸値上昇

大阪本場 水揚げ少なく浜高影響 (10月24日みなと新聞)

大阪市中央卸売市場本場における10月中旬の上乾チリメンの中心卸値は前月下旬比200～300円高のキロ4000～3800円だった。品質の劣る製品が多いものの、水揚げが少なく、浜値が上がり、相場を押し上げた。シラスの主な水揚げ産地は静岡、愛知、大阪、兵庫、徳島、福島、茨城。入荷産地は兵庫、徳島など。魚種はカタクチにエビ類混じり。卸担当者は「今年はエビ類や魚類などの混じりが続いている」と嘆く。魚体は2～3センチで、クリーム色と灰色の体色。大阪本場仲卸は販売した分を買い足す程度。高値だが品質の劣る製品のため、積極的に買い付けず、在庫にしない。スーパーは相場高により販売に力が入らない。量目を減らし1品単価を抑えるような売り方をする。創作チリメンなどの加工業者、ホテル、外食産業、飲食店などの業務筋の引き合いは国内外の観光客数が多いため強い。今後の相場は保合いの見通し。卸担当者は「宮崎、熊本、高知での水揚げを期待する」と話す。釜揚げシラスの中心相場は前月下旬比200円高から保合いのキロ1900円。主に静岡産と愛知産を取り扱う。

イクラ異次元の高値に、 「ブラックボックス化」する製品価格 (10月30日水産揭示新聞)

海鮮ちらし丼や軍艦巻きなど、回転寿司からインバウンドまで必須アイテムのイクラが、今年とはとんでもない価格につり上がってしまった。主産地北海道の秋サケが予想以上に獲れず、ブランド力の高い北海道産イクラが3分の1に激減したためだ。代替品として用いられる輸入の冷凍卵も少なく、国内で製品化されても高値は必至。

(右欄上に続きます)

産地から大消費地に至るまで「こんな経験はしたことがない」と、イクラに携わってきた関係者は途方に暮れている。秋サケの記録的不漁が決定的となった10月に入って、都内に本社を置く商社筋が提示したイクラの販売価格は、衝撃的な高値になった。道東の大手トップメーカーの塩イクラがキロ3万3000円、醤油イクラは2万8000円、ロシア産冷凍卵から国内加工したサケ卵の醤油は1万2000円台、マス卵は1万円で、小粒で最も安いアラスカのベニ子でも6000円を超えていた。対象数量も数個、数十個と限定的で、北海道産のサケ卵を用いた醤油漬け2万8000円は受注ベースでの最低価格だ。近年、秋サケの不漁が募り、その都度イクラの価格は急激につり上がってはきたが、漁獲量がさらに昨年の3分の1に激減し、予想以上に獲れなくなった今年は一気に原卵コストが跳ね上がり、どこのメーカーもかつて経験したことのない製造コストに付いている。ただ、道東を中心に全道に散在するイクラメーカーにとって、製品が作れないのは致命的。ただでさえ近年の不漁続きで製品在庫が払底している中で、新物が作れないことは売り上げ減少に直結し、場合によれば消費地業者と交わしたシーズン前の契約不履行につながる可能性もある。このため採算割れ覚悟で原卵を集めなくてはならない加工業者の買いが浜値を押し上げ、10月に入るなりメスの魚価はキロ3000円台が定着し、中旬以降は散発的に4000円台も珍しくなくなった。不漁にもかかわらず比較的冷静だった昨年の2～3倍という、かつての経験則が当てはまらない緊急事態に陥ってしまった。すでに冷静さや需給などという理性的な理屈は通らず、「とにかく原料集め」が最優先で、価格はあとからといったメーカーがある一方で、最初から道産原卵による製造を今年は諦め、顧客にはほかのメーカーから受注ベースで集めて販売する老舗中堅もあり、加工業者の製造に対するスタンスの違いが例年以上に開いているようだ。

(次ページ左欄上に続きます)

ただ、秋サケ卵を諦めても輸入原卵も高騰しており、製造コストはこれまでとは段違いに高い。輸入の冷凍卵が高騰しているのは、マス卵の主要な原産国のアラスカとロシアがともに、今年のマス豊漁年を不本意な形で終えたため。アラスカは2つある主力漁場が当初予想の7割で終え、ロシア極東も22万トン止まりで2年前の半分以下で終わってしまった。米口ともに近年は自国（ドメス）消費が強く、ただでさえ減った原卵を確保するためにはドメス価格より高く支払う必要があり、10月上旬に行われたロシアパッカーの入札では北方四島物のマス卵でキロ45ドル、最近開かれたネット入札ではチャム卵で59ドル（120トン）と提示され、ともにそれに近い価格で買われたようだ。折からの円安もあってチャム卵の価格は原卵でも9000円に届くが、国産の生卵が目下、ざっと2万円ともいわれる中では“割安”に映るのも「（価格の）感覚が鈍ってきた」とメーカー関係者。本来なら味付け筋子に比重が置かれるアラスカの冷凍ベニ子も今夏はポンド7・80～8・00ドル、円価でキロ2800～2900円に付くとされ、ブリストル湾の豊漁で2000トン近く生産されたベニ子も今年は半分以上が醤油イクラに化ける見通しという。北海道産のイクラが昨年の3分の1になるということは、業界推定で約1500トンあった醤油イクラが500トンに減ってしまうということ。実際には生筋子の流通が減っているので、それらを加味して600トン程度は確保できそうだが、今年は小型で加工歩留まりも高くないとされ、さらにマイナスもあり得る始末。周年商材として広く使い道のある人気のイクラは、成長し続けるインバウンドやふるさと納税の需要にも必須アイテムだが、大消費地・東京都内の問屋筋では「モノも来なければ価格も出てこない」と、すっかり“ブラックボックス化”した現状に、もはや関心も示さなくなってしまった。

(右欄上に続きます)

〈豊洲の旬プラス〉むきカキ 広島東部の斃死増 先行きに不透明感 (10月28日水産揭示新聞)

今シーズンのむきカキ入荷は、近年の減産要因だった大量斃（へい）死が少ないとの先行情報や冷凍在庫の過剰感が伝えられていたことから、10月1日のセリ解禁前は比較的潤沢になるのではないかという楽観論があった。しかし、主産地の広島県の東寄り産地を中心に斃死の報告がここに来て相次いだことで先行き不透明になっている。24日のむきカキ入荷は岩手が1060キロ、広島が910キロ、三重が100キロで合計2070キロと今期初めて2トンを超えた。前年の2トン超えは10月25日だったのでほぼ前年並み。23日に本格化した主産地の広島が加わったことで入荷水準が一段階上がった。しかし、その広島から新たに伝わってくる情報が厳しいものが多い。広島市中心部に近い海域などの西寄り産地はさほどでないものの、東寄り産地からは大量斃死被害の報告が相次ぐ。高海水温を避けるため水深を調節したが、そのことで酸素不足となり斃死につながったとの声が出ている。24日の相場は岩手産の大サイズがキロ6000～5000円、中サイズが4300～3500円、小サイズが3300～2500円と超高値圏だった前年並み。宮城の入荷が29日に始まるが、需給の逼（ひっ）迫は解消される見通しが立っておらず、しばしの高値推移は続きそうだ。救いは「近年では珍しく、三陸産のカキの身質がよい」（卸）こと。高値なことは避けられないものの、味という点からは満足のいく身質のものが多くなるとみられる。

チェーン協9月販売額 7ヶ月連続プラス達成 水産はサンマ・刺身動く (10月28日水産揭示新聞)

総合スーパー（GMS）主体の日本チェーンストア協会が23日に発表した9月度の会員企業の総販売額（速報値）は、1兆60億2794万円で7か月連続の前年比プラスを達成した。

(次ページ左欄上に続きます)

日曜日が1日少ない中で衣料品（既存店前年同月比7・4％減）の落ち込みこそ顕著だったが、住関品（1・6％増）と主力の食料品（1・6％増）の伸びが全体を押し上げた。客数は99・1％、客単価は102・2％。およそ7割の構成比を占める食料品の販売額は7213億2219万円で、6か月連続ですべてのカテゴリーが前年を上回って推移した。依然、冷凍食品やコメなどを含むその他食品（2・3％増）の好調は続くものの、節約志向の高まりなどもあって前月までと比べて惣菜（1・4％増）の伸びの鈍化が目立った。水産品については583億7054万円（1・5％増）。水揚げが振るわない生秋サケや生ガツオに加え、日持ちする漬魚、開き物、チリメンなどの動きは鈍かった。ただ昨年より漁獲がまとまった生サンマやメインの刺身、旬の筋子などがまずまずでプラスに寄与した。このほか、惣菜は寿司は順調に推移したが、焼き鳥・焼き魚といった温惣菜は低調。そのほか食品ではコメや冷凍食品は動いたが、缶詰やおでんセットなどの販売額は前年を下回った。足元の動きは、食料品が全体をリードする展開に変化はみられない。食料品以外の主要3部門では住関品は「洗剤などで特売時にまとめ買いがある」としてまずまずな一方、衣料品は上旬は比較的気温が高かったため秋物が停滞気味という。

紀文食品「鍋白書 全編」を公表 家庭のおでんの出現率27年連続トップ

（10月30日水産揭示新聞）

（株）紀文食品はこのほど「紀文 鍋白書 前編」を発表した。「紀文・主要7地域 家庭の鍋料理調査」の調査結果を公表。調査は主要7地域の20～50代以上の主婦1400人を対象に、2007年から実施した。それによると、好きなおでん種のトップはダイコン。次いで、玉子、コンニャクが続き、ねり製品は5位にハンペン、6位にチクワ、10位にさつま揚げが続いた。

（右欄上に続きます）

エリア別のおでんの煮込み時間は平均で62・03分。煮込み時間が最も長いのは大阪府で79・66分。味が染み込むのに時間がかかる牛すじを入れることも関係しているのではないかとみられる。いちばん短かったのが東京都の46・13分だった。また今まで入れたことがなく新しく入れてみたい種については「タコ・タコ串」「ロールキャベツ」が上位に入った。鍋料理に関する調査については、家庭の鍋料理の出現率は27年連続「おでん」が1位を獲得。どのエリアもおでん出現率が1位となり人気ぶりをうかがわせた。年代別では30～50代以上の1位はおでんだったが、20代は1位がキムチ鍋、2位がおでんだった。好きな鍋料理については1位がしゃぶしゃぶ、2位すき焼き、3位おでんが並んだ。20代では昨年の調査結果と比較すると、どの鍋料理も割合が下がったが、おでんはほぼ同じ数値を維持しており「若者からの支持も変わらず厚く、時代の移り変わりにも影響されず定着している様子がうかがわれた」（同社）と分析した。

【さかなの動き】 冷凍カツオ 焼津 PS相場は保合い 漁獲サイズばらつき

（11月3日みなと新聞）

冷凍カツオのうち、海巻船が南方漁場で漁獲し、焼津漁港（静岡県焼津市）に水揚げするブライン凍結特別選別品（PS）の10月下旬時点のPS相場は、各サイズとも前月下旬から変わらない。商社は「海巻船の操業は漁獲、漁場ともに不安定」と説明。サイズ組成は1・8キロ前後から大型化しているが、特別多いサイズ帯はないという。同時点のPS相場は4・5キロ上がキロ280円、2・5キロ上が315円、1・8キロ上が295円。需要の集まる2・5キロ上の水揚げも増えているが、船によってサイズにばらつきがある。商社は直近ではキハダマグロの漁獲も増えているとする。漁獲サイズの改善でPSの生産比率は高く、節や缶詰に回るブライン凍結品（B）の相場は、先行き不安から高値傾向にあると話す。

（次ページ左欄上に続きます）

今年は三陸・東沖の「戻りカツオ」が記録的な不漁で、南方のカツオ製品に支持が集まる。来春のたたき商戦に向けた原料在庫も始まる時期だが、「考える余裕がない」と商社。来春の引き合いは強いとみるが、仕入れや加工キャパシティがネックになると指摘する。商社は「まとまった搬入が続くと原料事情は改善される。動向を慎重に見極めたい」と話す。

秋サケ情報 依然不漁 11月3日現在で
昨対7割減

(11月5日水産掲示新聞)

北海道の秋サケ漁は、10月31日に260トンとまとまったあと、11月に入って1日63トン、休漁日の2日ゼロ、週明け3日36トンと続き、同日までの累計漁獲量は1万3290トンで前年同期の32%で推移している。3日の少なさは一候の影響で休漁した浜が多かったためとみられるが、いずれにしても近年断トツの不漁に変化はなく、漁期が残り1か月弱の最終盤に差し掛かって、好転の気配はない。

北海道産イクラ新物卸値2倍 マルサ笹谷商店
しょうゆに2万8000円

(11月3日みなと新聞)

北海道秋サケ漁が史上最低の不漁となる中、道産新物イクラが出回り始めている。4日、トップブランドのマルサ笹谷商店（釧路市）の今年産しょうゆイクラが東京・豊洲市場や札幌市場などに上場。卸相場は前年同期の2倍強となるキロ2万8000～2万7000円が打ち出された。しょうゆイクラ2番手以降の価格帯はキロ2万5000～2万円。塩イクラはキロ3万円前後を付けており、いずれも前年同期の2倍前後の水準に跳ね上がる。「経験したことのない高値。需要は限られると思うが、道産の品質の良さをアピールしてスムーズな販売を心掛けたい」（札幌市場卸）

供給激減で未知の高値 史上空前の不漁で高値はやむを得ない状況ではある。道漁連日報によると、3日時点の道秋サケ水揚げ量は前年同期比68%減の1万3290トン。

(右欄上に続きます)

雌Bは一部産地でキロ4000円超え、生スジコ市況もキロ2万円を超え、いずれも前年の2・5倍前後を付け、記録的な高値だ。すでに漁期終盤を迎えており、11月末の最終水揚げ量は1万5000トン弱といったところ。道漁連の推定値によれば、昨年の漁獲量4万3600トンから産出された生スジコは約2600トン。歩留まりを昨年並みと仮定すると、今年1万5000トンから産出される生スジコは推定900トン程度と前年比75%減となる計算。笹谷商店の笹谷剛社長は「漁獲が7割減といえども、イクラ生産量はそれ以上に減って昨年の5分の1ほどでは。これまでにない高値だが、道産イクラの火を絶やすことのないよう供給責任を果たしていきたい」と話している。

最需要期迎えた国産養殖マグロ
ハレの日欠かせぬ目玉商材

(11月3日みなと新聞)

ヨコワが2年連続不漁 来年以降は出荷調整か

国産の養殖クロマグロが最需要期を迎えた。量販店は安定した品質と供給が見込める生マグロとして高く評価し、寿司など外食にも広く浸透。ハレの日、年末商戦には欠かせない商材だ。年末商戦に向けては「需要は堅調」と商社。一方、養殖に必要な種苗（ヨコワ）の巻網漁は、2年連続の不漁に見舞われた。今後は在池量の減少が見込まれ、出荷調整も予想される。業界の注目が集まる短期養殖を含め、動向を取材した。量販店にとって1年間の総決算となる年末商戦は、養殖マグロが最も存在感を発揮する場だ。安定した供給で販売計画を立てやすく、天然物と比べて不安要素も少ない。水産売り場では、付加価値品の寿司で目玉ネタとして使うケースも多い。末端業者にとっては扱いやすい生の脂商材だ。国産養殖物の魅力は変わらないが、来年以降の原料事情は厳しくなりそうだ。複数の商社によると、種苗となるヨコワの漁獲は2年連続の不漁。巻網の操業を例年より引き延ばしたが、ある商社は「種苗の確保は計画を大きく下回る」と明かす。

(次ページ左欄上に続きます)

昨年は順調だった引縄のヨコワ漁も、状況は芳しくないという。大手商社による短期養殖の推進も、種苗確保数の減少に影響したとみられる。水産庁の発表では、2024年の種苗活け込み数は、2%減の50万8000尾だった。天然種苗は9%減の34万尾で、このうち、巻網による採捕が27%減の17万8000尾、引縄による採捕が23%増の16万2000尾だった。商社関係者は操業状況を踏まえ、巻網由来の種苗活け込み数はさらに減ると指摘する。安定した相場も魅力の一つである国産養殖マグロだが、商社は原料減少を理由に値上げする方針だ。来年以降の値上げを見据え、年末商戦は「前年並みの大相場であるキロ3500～3000円を維持したい」と商社。安定した相場は魅力の一つだが、量販店や市場関係者からは「国産養殖物の相場は前年よりも高い」という声も聞こえる。2年連続でヨコワの確保が落ち込むことから、27年秋以降の原料は不足する。ある商社は「年内も積極的に売るわけではない」と話す。大きな混乱を避けるため、年明けから出荷調整に踏み切る可能性も高い。出荷数を平準化し、原料が極端に少ない年が発生する状況を避ける狙いだ。種苗の好不漁だけが、原料価格に影響するわけではない。クロマグロ養殖は配合飼料も使用するが、基本的にはイワシやサバを餌に使う。飼料コストをはじめ各経費が値上がりすることから、商社は「値上げそのものは避けられない」と理解を求める。

対中輸出にも注目 対中輸出も大きな鍵となりそうだ。中国政府が6月末に禁輸解禁を解除すると発表。水産業界では施設登録や放射性物質の検査など、各種手続きが進む。具体的な再開時期は依然として不透明だが、国産の養殖マグロにも注目が集まる。禁輸措置以前は東京・豊洲市場から脂商材を中心に輸出していた。中国は23年8月の禁輸措置以降、スペイン産生鮮大西洋クロマグロの輸入を強化。

25年の輸入量は9月時点で前年を上回る874トンに上る。中国は22年に日本から916トンの生鮮太平洋クロマグロを輸入し、スペインからの輸入量も同程度まで拡大する可能性がある。中国の輸入再開に向けては「オファーはある」と商社。各社とも輸出の拡大に意欲をみせる。鮮度維持や輸送コストの観点から、中国にとって日本産養殖クロマグロを扱うメリットは大きい。しかし、香港や東南アジアからも引き合いがあり、種苗の不漁による原料不足も見えるため「どこまで対応できるかは分からない」とも話す。

【さかなの動き】 養殖マダイ 浜値930円
中心続く 下げ要因見当たらず (11月3日みなと新聞)

愛媛産養殖マダイの10月下旬の産地相場は、1・8キロアップがキロ960円となっている。大サイズの品薄を補う形で9月に950円に値上げしたが、現在はさらに10円上がった。中心サイズは930円で、900円台の相場は3年以上続く。コストアップ型インフレの中で相場を下げる要因は見当たらない。夏場からの高水温や、赤潮対策による給餌量の減少が原因で、マダイの成長遅れや歩留まり低下が出ている。成長の回復は思ったより遅いようだ。餌料や資材の高騰などでマダイの生産コストは上昇している。愛媛産の相場は、2017～19年にかけて900円を上回る相場が22カ月続いた。その後、20～21年前半にコロナの影響で需要が激減し、600～500円台にまで低迷。21年10月から回復し始め、23年には980～960円を記録した。記録的な高値安定が続く中で大サイズの品薄を補う形で1・8キロサイズを値上げしたが、今後の成長に伴い大サイズの品薄は解消に向かうとみられている。一方、韓国向け年間輸出量は20年から4000トンを上回る実績で推移している。25年1～9月累計は数量が前年同期比19・3%増の4778トン、金額は19・3%増の48億588万円。